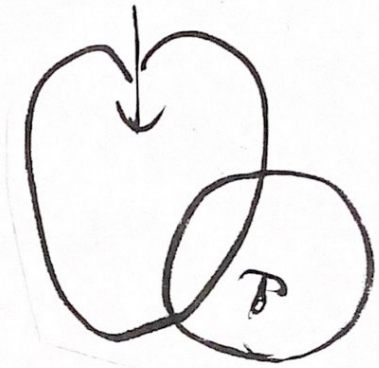
母塾

VOl・30　　2019・12・ 3



新小岩幼稚園・未就園児クラス

illustrated by kurumi

『 もうひとつの陣痛 』

アドバイザー　猪之鼻晴子

前回の未就園児の遊びの会の座談会。9人のママと1人のパパ、1人のおばあちゃんの参加。おばあちゃんと言っても聞けば私より年下だった。
2才児の子どもと暮らす毎日はいかに大変か、という話になりどのママも疲れている。
「今、子どもと過ごしていて楽しいですか？」と訊くと手を小さく挙げたのはおばあちゃんだけ。
「大変だな、苦しいなという方は？」と訊くと全員の手が挙がった。
アンケートには「自分の時間が欲しい」と書いてあった。
2才児の子どもと過ごす毎日は心身ともにキツいことだと思う。朝から追いかけて追いかけられて。怒鳴ったり泣かれたりで一日が終わってしまう。ゆっくりと1人で過ごす時間はなく、食事もお風呂も自分は後回し。子どもと倒れこむように眠ってしまう。起きたらまた始まる。
たぶん、どのママも全力疾走している。自分がどこに向かって走っているのかも落ち着いて考える時間もなく、無我夢中の毎日。早くこの時期が終わらないかなと思ってしまう。
ママたちの気持ちが痛いほど分かる。「私が下手なのかな。」と何度泣いたことか。

何度もこの時期を経験すると「もうひとつの陣痛」なのだとわかった。
0～3才までの子どもはママの身体からは出たけれど、まだ分離されていないのだ。
くっついている子どもをまた産み出す痛みを伴う時期なのだと思う。
陣痛には必ず間隔がある。「こら！何でそんなことするの？」とカーっとする痛みの間に一緒に笑ったり、寝顔を見てホッとする時間もある。
どしゃ降りの中、赤ちゃんを抱っこして2才の子の手を引いて歩いていると、もう無理だと最高の陣痛の波が来たりもする。先も見えない、後戻りもできない。
3才になると少しずつ言葉も理解し、幼稚園の先生やおともだちが一緒にその子を育ててくれる。
幼稚園の門を泣かずにくぐった時が「もうひとつの陣痛」が一段落した時かもしれない。

それから先も子どもはたびたび痛みをくれるけれど、私たちはその度に痛みの波を乗り越える。
「早くこの時期が終わってくれないかな。」という痛み。それは確実に人間を産み出している。
先輩ママは小さな子を育てるママの陣痛を少しでも楽にしてあげる助産師でしかない。
「今が一番苦しいけれど、もうすぐだから。」と声をかける。
24才の長男の同級生のママたちに会う。彼女たちは私の子ども乗せ自転車とヘルメットを見て、必ず「まだやってるの？」「いいなぁ。まだ子育てできて。」と羨ましそうに言う。「懲りていないの？」と訊くと「おんぶと抱っこの時に戻してよ。」と言う。「あの時期が一番良かった。」と。
小さな子を抱えて泣きごとを言っていたことなどすっかり忘れている。
どうやら女性は子どもを産むために辛い陣痛を忘れてしまうようにできているようだ。
「あの時はひとりになりたいな、って思っていたけれど。すぐにひとりになれた。しかもずっと。」
自分の時間はあり自由だけれど、あの子どもとくっついていた時間が一番充実していたのだ。
懲りない私は孫みたいな4才の子どもをまだ育てている。
終わりがすぐに来てしまうことは5人で学んだので、「この時期が終わらないといいな。」と思う。
ずっとずっとくっついていたいな、とおばあちゃんの子育てをしてしまっている。

harukoinohana1717@gmail.com